

ブリットル型糖尿病透析患者に対し少量 GLP-1 受容体作用薬

(GLP-1RA) が奏功した一症例～CGM による検討～

長崎腎病院

○川口利江 青柳真生 白井美千代 丸山祐子 佐々木修 一ノ瀬浩
澤瀬健次 橋口純一郎 原田孝司 船越哲

糖尿病透析患者においては、血液透析によりインスリンが除去される為、特に透析日による血糖変動が大きい。また、ブリットル型糖尿病を併用した患者は、食事・運動療法・インスリン療法が遵守されているにも関わらず高血糖と低血糖を頻回的に繰り返す為、日常生活に重大な支障をきたす。

急激な血糖変動は、交感神経の過緊張を招き、心血管イベントのリスクに要因となる。

Basal-bolus 療法と α GI(ミグリトール)、またグリニド剤 (ミチグリニド) や DPP-4 阻害薬 (テネリグリプチン) にて血糖コントロール困難で、特に低血糖発作を生じていた症例に対し、GLP-1 受容体作用薬を開始した。最初リラグルチド 0.3mg で激しい嘔吐が出現したため、デバイスが 5 クリックで 0.3mg であることより 2 クリック (約 0.12mg) から開始し、3 クリック (約 0.18mg) としたところ低血糖の頻度が減少し、血糖変動も安定する傾向となり、嘔吐も出現しなかった。その後、更なる安定を目指して、リラグルチドを週 1 回製剤のデュラグルチド 0.3ml (約 0.75) としたところ、より安定した血糖変動となっている。今回ブリットル型糖尿病症例で GLP-1 受容体作用薬が血糖変動を抑制した理由は、推定の域を出ないが、グルカゴン等インスリンを介さない血糖改善作用・臍外作用が考えられた。また、効果検討に当たっては、CGM で血糖変動を追いながら薬剤の種類や量を調整できたことがより正確な評価につながったと考える。